相 生 町 の 方 言

方言班（徳島方言学会）
金沢　浩生[1)]・仙波　光明[2)]
岩佐　美紀[3)]・石田　祐子[4)]

1．相生町の方言区画上の位置

那賀川中流域に位置する相生町は、方言区画上「うわて中分（なかぶん）」に属する（森重幸1982）。「うわて」は那賀川・勝浦川流域を中心とする地域を指し、その東端は小松島市・羽ノ浦町・阿南市となるが、これら「うわて里分」に対して、「うわて中分」に属する地域は、勝浦町南部・鷲敷町・上勝町・上那賀町東部、そして相生町である。相生町は南の日和佐町に隣接するが、日和佐は方言区画上「灘（なだ）」（または「海部」）と呼ばれる地域である。

2　発音から見た相生方言

1）セ・ゼの発音

県下全般にセ・ゼをシェ・ジェと発音することがあり、「うわて」ではこれが顕著な傾向が指摘されているが（森重幸1982ほか）、今回の調査では認められなかった。すべて、セ・ゼであった。

2）合拗音（ごうおうよん）

まれに観察できた。会社（クワイシャ）［kwaiʃa］、外見（グワイケン）［gwaikeN］（70代男性）

3）濁音の前の鼻音

「うわて」「灘」に共通の現象として、ガ行・ダ行の前に鼻音が現れやすく、語頭に現れることもあることが指摘されている（宮城1956）。具体的には、次のような例が観察できた。

語頭の例　ᶯガネ［ŋane］（蟹）。なお、［gane］が現れる方が多い。

語頭以外の例　不合格［Fuŋo:kaku］、肌色［ha^{n}dairo］（ハᶯダイロに近い発音）、ほうだろう［hõdaro:］（ホーᶯダロー）など、かなり多く観察できる。しかし、その鼻音は意識されておらず、［ha^{n}dairo］という発音を聞いて貰うと、おかしいという答が返る。丁寧な発音（はっきり言いかえようとする場合）では鼻音が現れないと言う傾向が認められる。

1）徳島市北矢三町 1-3-2　　2）徳島大学総合科学部
3）徳島大学総合科学部学生　　4）徳島大学総合科学部大学院生

4）アクセント

相生町のアクセントは徳島市と同じである。県南では一般に3拍の形容詞に古い形を残し、「赤い」「暑い」が高高低（HHL)、「白い」「熱い」は高低低（HLL）となることが多い。相生町の調査でも同様の傾向が残っているが、両方ともにHLLになる場合も観察される。

3．相生方言の疑問終助詞

疑問の終助詞のうち、方言区画上からもっとも興味深いのが、カ・ケ・コである。「行くか」と尋ねる時に、「行くカ」と言うのは、全国で通用する。「行くケ」は阿南市南部と「灘」で使われ、「行くコ」は「山分」（剣山麓一帯）とその周辺（上郡・下郡・うわて各地域の中分）で使われてきた。

今回の調査では、那賀川流域一帯を対象とし、上記以外の疑問終助詞を含め、主として待遇上の価値の差に着目して調査・分析した。

なお、疑問終助詞に関する調査に協力していただいたのは、木頭村および木沢村の男女各1名ずつ、上那賀町の男性3名、相生町の男性6名・女性3名、鷲敷町の男性3名、那賀川町の男性1名、女性3名、阿南市および羽ノ浦町の男性各1名、合計25名（男性17名・女性8名）である。すべて生え抜きの人で、上那賀町の一人をのぞく全員が60歳以上である。

1）使用語形の把握

まず、どのような語形が現れるかを把握するために、次のような質問をした。

（**質問**）あなたが「明日は用事がありますか」と聞く時、「ありますか」の部分をどういいますか（日常生活でもっとも頻繁に使う語形を回答として採用する)。

このような質問を通して、「ありますか」「行きますか」「帰るのですか」「いりませんか」の、それぞれにどのような語形が使われるかを確認した。次に、「アルンカ、アルンケ、アルンコ、アルンデ、アルン」等を示し、あるいは口頭で例示して、これらを使用するかどうかを聞いた。

2）各語の出現状況

調査の結果、那賀川流域においては、「カ」・「ケ」・「コ」・「デ」・「ン」・「エ」・「カエ」の7語形が疑問終助詞として主に使用されていることが分かった。

それぞれの語形について、その言

表1　那賀川流域において主に使用されていた疑問終助詞の語形とその数

語形	ありますか	行きますか	いりませんか	帰るのですか	合計
「カ」	15	18	19	17	69
「ケ」	1	1	1	1	4
「コ」	6	7	6	5	24
「デ」	13	12	15	9	49
「ン」	7	5	2	9	23
「エ」	0	0	0	1	1
「カエ」	1	5	2	0	8

い方の例を挙げてみると、「イランカ」、「アル（ン）ケ」、「イク（ン）コ」、「イランデ」、「カエルン」、「カエルンエ」、「イクンカエ」である。

表１から分かるように、「カ」と「デ」の使用が非常に多いのに対して、「ケ」・「エ」・「カエ」はわずかしか使われていないように見える。これは、「日常生活でもっとも頻繁に使う語形」を集計した結果であるため、このような結果になっているのである。

以下に、それぞれの語形がどの地域でどのように使われているかを、順を追って述べる。あとに添えた例文は、本調査に併行して採取された談話資料等からのものである。

「カ」　この項の始めに述べたように、全国共通語として通用するが、那賀川流域一帯でも広く使われている。

「ケ」　「うわて里分」「灘」での使用が多い語だが、相生町では、使う＝４、現在でも聞くが自分では使わない＝４、昔聞いたことがある＝１、という回答が得られた。木頭村と鷲敷町でそれぞれ２名から「聞く」という回答が得られており、上那賀町で１名から「使う」という回答がある。しかし、上那賀町の他の回答は「聞いたこともない」というものであり、下流域でも同様であった。

○カンマンケ。（構いませんか。　相生町　59歳女性）

「コ」　相生では、「現在でも聞くが……」と答えた１名以外は、全員が「使う」という回答であった。あとは上那賀町と木沢村で１名ずつから「使う」という回答が得られているが、その他は「聞いたこともない」という回答になっている。那賀川流域に限定してみると、「コ」の使用は、相生方言の特徴と言えよう。また、森重幸（1962）と比較すると、「コ」は衰退しつつあるものの、相生方言にはよく残っていると言えそうである。

○オチャ　クムコ。（お茶をいれましょうか。　相生町　84歳男性）

「デ」　「カ」と同様に流域一帯で使用されているが、「日常生活でもっとも頻繁に使う語形」として挙げられた回答の現れ方を見ると、相生町を含む下流域では頻繁に使われるのに対して、上那賀町から上流域ではそれほど使われないという結果になっている。

○クルマ　コートンデ。（車を買っているのですか。　鷲敷町　50歳男性）

「ン」　「デ」と同様の結果が得られている。

○ドコノ　ダイガク　イッキョン。

（どこの大学へ行っているんですか。　那賀川町　55歳男性）

「エ」　「日常生活でもっとも頻繁に使う語形」としての回答は１名から得られただけだが、「イクンエ」といった言い方をすることがあるかどうかを尋ねると、相生町では２名から「使う」という回答が得られ、「自分では使わない」という回答が

５名であった。羽ノ浦町（３名）、鷲敷町（１名）、木頭村（１名）で「使う」という回答も得られた他は、「自分では使わない」という回答が多かった。「聞いたこともない」という回答も得られている。女性のほとんど（７名）が使うというのに対して、男性は２名のみが使うと解答している。また、本調査に併行して採取された談話資料の中では、この「エ」は、那賀川町の女性にしか使用が認められなかった。地域的な特徴とともに、主として女性に使われる語形と言えようか。また、この「エ」の発音を注意して聞いてみると、「イェ［je］」と発音されることが多い。

○コレ　ダレノ　エプロンエ。（これは誰のエプロンですか。　那賀川町　51歳女性）

「カエ」　ほぼ全域で「使う」という回答が得られているが、「日常生活でもっとも頻繁に使う語形」としての回答が得られたのは、上那賀町・相生町・鷲敷町・那賀川町であった。男女ともに使うようである。

○ナンカ　エーン　アッタンカエ。（何かいい物はありましたか。　那賀川町　55歳男性）

３）各語の待遇価値

上記の終助詞が、それぞれどのような待遇価値を伴って使われているか、すなわち、目上に対して使えるかどうか等を調査するために、以下の質問を行った。

（**質問**）次の場合、あなたが「明日は用事がありますか」と聞く時、「ありますか」の部分をどういいますか。

①近所の目下の者に対して聞く時

②近所の同年代の者に対して聞く時

③近所の目上の者に対して聞く時

同様に、「今日は祭りに行きますか」と聞く時の「行きますか」の部分、「もう帰るのですか」と聞く時の「帰るのですか」の部分を、「これはいりませんか」と聞く時の「いりませんか」の部分を、それぞれどう言うかを質問し、現れた疑問終助詞を整理すると「表２」のようになる。

なお、ここで「近所の」と限定をしたのは、初対面の人に対する場合だと、目上・目下にかかわらず疑問終助詞の使用に差がなく、ほとんどが共通語の「～ですか」になることが予備的な観察から明らかだからである。

表２　那賀川流域における待遇別疑問終助詞の回答数

語形	目下の者	同年代の者	目上の者
「エ」	1	1	1
「カ」	59	56	23
「ケ」	0	0	2
「コ」	20	23	3
「カエ」	2	2	1
「ン」	11	11	9
「デ」	7	7	61

表２から、明らかに待遇価値を伴って使用されていると認められるのは、「カ」・「コ」・「デ」の３種類であることが分かる。「カ」・「コ」は目上に対しては使いづらく、「デ」は圧倒的に目上に対する言葉になっている。ところで、回答数は少ないものの、「ケ」

が目上に対して使われるということに注目しておきたい。「デ」と同様に、敬意の含まれた表現だということが若い世代には気づかれなくなりつつあると思われるからである。

また、回答数が少ないので断定的なことは言えないが、「エ」「カエ」「ン」は、目上から目下まで相手に関係なく現れている。これらは、いわば「たしなみの表現」あるいは「品格保持」の表現として機能しているのではないだろうか。「エ」や「ン」が与える、耳に柔らかな印象がそれを許しているのであろう。

4）まとめ

以上から待遇価値の順位付けが可能な疑問終助詞を、その待遇価値が低い順に、つまり目下に対して使う語から目上に対して使う語の順に並べると、「コ→カ→ケ→デ」の順になる。この結果は、徳島県下全般を対象として森重幸（1962）が指摘したものと同じである。また、それ以外の「エ」「カエ」「ン」は、今回の調査では十分な回答数が得られていないので、順位付けは保留したい。

4．その他の特徴的な語法など

紙幅の関係で、一、二の点を指摘するに留める。サ行五段活用のイ音便形は、山分に残る言い方との指摘がある（金沢1961）が、その痕跡的な例が認められた。「（蛇の体が）アオミザイタ（青みが指した）」がそれである。また、強調・反語の表現に「イカイジャ（行かなくてどうする、行くぞ）」のような「～イジャ」という形式も認められるが、これは「灘」と通ずる言い方のようである（金沢1961）。

5．相生町の方言語彙（ごい）

以下に、相生町方言語彙の特徴的と思われるものを列挙する。『相生町誌』（1973年）をもとに協力者に教示を受け、改めて注釈を施し、例文を掲げた。また、『鷲敷町誌』、『木頭村誌』、『阿波言葉の辞典』を参考に追加調査をしてその結果によって加除した。アクセントを確認した語については、高く発音される部分に上線を付けて示した。

あえる（動下一）　粒がこぼれ落ちる。〈小粒の穀物についていう〉

あかこすり（名）　蜂の一種、どろばち。

あさき（名）　建築用材にならない雑木、「くろき（杉、桧など）」の対。

あしらう（動五）　病気の養生をする。マー　ムリ　セントニ　アシライナハレヨ。（まあ、無理をせずにご養生なさいよ。中男→老男）

あずる（動五）　てこずる。「こんりゃげる」とも。コン下ノ　シゴトニワアズッタワイ。（今度の仕事にはてこずったわい。中男→同）

あば（名）　川岸の貯木場。筏（いかだ）を組むまで材木の流失防止のため、針金、ワイヤーなどを張りめぐらす。

あびす（名）　柚子の酢をびんに詰めると上部に浮かんでくる白いカビのようなもの。これがあるのが上質のあかしである。

あます（動五）　お札、神仏の掛け軸などを「廃棄する」ことの直言を避けた表現。コノ　オカケジワ　フルンナッタケン　モー　アマスカ。（このお掛軸は古くなったからもう廃棄しようか？中男→妻）

あまめ（名）　焚火などに当たった時、肌にできる赤い斑点。

あらく（動五）　時間や空間の間隔が開く。ニーサントワ　下シガ　ココノツモアライトルケン　フー。（兄さんとは歳が九つも離れているからね。中男→同）

あんかごぶじ（句）　危急に気づかず平然としていること。「うんかごぶじ」とも。コノ　ダイジナ　下キニ　ホンニンワ　アンカゴブジジャ。（この大事なときに本人は平気なものだ。老男→同）

あんだいな（形動）　不安な。不確かで気掛かりな。アンダイナ　下コ　アルンナラ　ヨー　シラベトケヨ。（試験準備で不安な箇所があるのならよく調べておけよ。中男→子）

あんりゃい（名）　来客の接待に、特に用意せず、あるものを出すこと。コレ、アンリャイジャケンド　オアガリナシテ。（これは、ありあわせのものですがお上がり下さい）

いぐさ（名）　冗談。酒落。「いいぐさ」とも。

いがる（動五）　大声で叫ぶ。

いきる（動五）　子供などが興奮して暴れる。牛馬の場合にも用いる。

いぐい（形）　苦くて辛く、アクのある味わい。人の個性にも用いる。

いぎ（名）　里芋などを洗う時に用いる目籠。

いける（動下一）　埋める。ネギヤコイワチョットズツ　ヌイテキテ　ニワニイケテアル。（葱なんかは少しずつ抜いてきて庭に埋めてある。中女→同）

いこめいこめ（副）　めいめい。口々。イコメイコメニ　カッテナ　コト　ユーケン　マトマラン。（各自めいめいに勝手なことを言うからまとまらない。中男→同）

いたくら（名）　すずめ。

いちゃくそ（名）　批判。苦情。筋の通らぬ言い分。

いっこも（副）　ちっとも。アノシトノユーコト　イッコモ　アテニ　ナラン。（あの人の言うことは少しもあてにならない。中男→同）

いっこん（数）　一つ。〈小さい物を数えるとき、一つだけに用い、二つをニコンとは言わない〉

いっさんがい（副）　全部。持ち物などのすべて。

いっしに（副）　常に。いつも。ずっと。アイツ　コノゴロ　イッシニ　キヨルフー。（あいつは最近いつも来ているね。中男→同）

いやみず（名）　鮎漁の用語。川の水の濁りが長引いたため鮎がそれに慣れて、動きが止まり、とれなくなる状態。

いりわり（名）　表面に現れない複雑な事情。

いれみ（名）　贈り物のお返しのしるしに、先方の風呂敷や容器に入れる「うつり」。

いろめる（動下一）　なぶり、からかうこと。「いろべる」とも。ホヤッテ

ムスメハン　イロメルンジョー。（そんなにして娘さんをからかうんだよ。老男→同）

いわす（動五）　勝負ごとで金品を奪い取ること。「いわっしゃげる」とも。

いんにゃ（感）　いいえ。そうではない。「うんにゃ」とも。

うけくち（名）　木材伐採の際、倒そうとする側に予め入れておく切れ目。

うたてい（形）　情けない。困る。残念だ。心外だ。キョーラ　アメガフッテウタテイ　フー。（今日は雨が降っていやだねえ。中男→同）

うち（代）　①女性の自称。②自分の家。「うちんく」とも。

うっぽーる（動五）　投げ捨てる。〈品位下〉

うつる（動五）　着物などがその人によく似合う。ホレ　ヨー　ウツットンノッ。（それあなたによく似合っているじゃないの。中女→娘）

うどむ（動五）　苦痛で「うなる」。〈品位下〉

うとる（動五）　①うとうとと眠る。②湿る。コノ　シオワ　ウトッテモートンチ。（この塩は湿ってしまっているわね。中女→家人）

うまえる（動下一）　湯に水をさして適温にする。

うもれる（動下一）　蒸し暑い。キョーラ　ヨー　ウモレル　フー。（今日はひどく蒸し蒸しするね。老男→同）

うら（代）　男性の自称。〈古い形で、親しい人に対してにいう。品位下〉

うるか（名）　鮎のはらわた。酒の肴（さかな）に珍重される。

うんすけ（副）　たくさん。「うんと」の強調・諧謔（かいぎゃく）表現。アイオ　ウンスケ　ツッテモンタ。（鮎をうんとたくさん釣って戻った。少男→同）

えー（副）　下に打ち消しを伴って不可能を表す。「よー」とも。ウチヤ　ホンナコト　エーセン。（私なんかそんなことできないわ。中女→同）

えっと（副）　下に打ち消しを伴って「久しく～しない」の意。「ヤット」ともいう。〈久しぶりのことを「えっとぶり」という。〉エット　アワナンダ　ノー。（長い間会わなかったね。中男→同）

えがむ（動五）　ゆがむ。クギガ　エガンドル。（釘が曲がっている。）

えくそいき（形動・副）　むちゃくちゃに。〈「～いきに」は状態を表す接尾語〉センソーチューニ　キオ　エクソイキニ　キッタ　モンヤケン…（戦争中に木をむちゃくちゃに切ったものだから…老男→同）

えご（名）　川の湾曲部が掘れ込んで深くなっているところ。

えで（名）　鮎漁のおとり。

えんま（名）　かまきり。〈子供は「えんまさん」という。〉

おきょい（名）　大きい。「おっきょい」とも。

おーどーな（形動）　横着な。不誠実な。スワッタナリ　ヘンジシタリシテオードーナ　ヤッチャ。（座ったまま返事をしたりして、横着な奴だ。中男→同）

おーばっそー（名）　崖や山の崩壊。カイカワデ　オーバッソーガ　イトッタワ。（海川地区で崩壊が起こっていたよ。老男→中男）

おーぼる（動五）　①覆いかぶさる。ミチノ　ウエオ　オオケナ　エダガ　オーボットル。（道の上を大きな枝が

覆いかぶさっている。中男→同）②かばう。偏愛する。目をかける。オトゴジャケン　ミナデ　オーボットルワ。（末っ子だから家族みんなで溺愛（できあい）しているよ。中男→同）

おいやま（名）　狩猟。

おいやまど（名）　狩人。

おぐろ（名）　もぐら。「おぐろもち」とも。

おげった（名）　ほらふき。信用できない人。「とっぱくろ」とも。

おじゃみ（名）　お手玉。

おそなわる（動五）　集会などに遅参した時のあいさつ。〈オソナワリマシタの定形のみ。〉

おとましい（形）　不愉快な。厄介な。ホナナ　オトマシーコト　ユーナ。（そんなに厄介なことを言うな。老男→同）

おどろく（動五）　目を覚ます。

おなめづら（名）　性格はきついのに外見は優しく見えるさま。〈「おなめ」は牝牛のこと〉アイツワ　オナメヅラシトルケンド　メンドイトコ　アルゾ。（あいつはおとなしそうに見えるが、むずかしいところがあるぞ。老男→中男）

おやがた（名）　総領の兄。本家で後継をする兄。

おら（代）　男性の自称。親密な人に対して言う。〈品位下〉

おらえる（動下…）　重いものを一人で持ちこたえる。スグ　イクケン　ホレマデ　オラエトレヨ。（すぐ加勢するからそれまで我慢しておれよ。中男→小男）

おろ（名）　焚きつけにする乾燥した雑木の小枝。

おんごく（名）　山奥。僻（へき）地。

おんぶく（名）　神仏に供える米や賽銭（さいせん）。それを入れる袋を指すことも。

～かい（文末）　疑問の文末詞。アニキワオルカイ。（兄さんは居るかい？中男→小男）〈当方言では疑問の文末詞として「かい」「きゃあ」「け」「こ」がある。〉

がいな（形動）　気性が激しい。〈徳島県北部では副詞「がいに（ひどく）」が多用されるが、南方は形容動詞として用いられることが多い。主として気丈な女性や、人並み外れた成果をあげた人の形容に用いる。〉

かきつく（動五）　すがりつく。

かきまぜ（名）　五目ずし。「まぜくり」とも。

かけー（名）　桟道（さんどう）。

かさ（副）　たくさん。〈程度、数量など用途は広い。丹生谷（にゅうだに）地方を代表する副詞。昭和に入ってから発生した語という説が有力。〉アノ　ショーセツワ　カサ　オモッショカッタ。（あの小説はたいへんおもしろかった。）アメガ　カサ　フッタ。（雨がたくさん降った。）アシコニャ　ゼニガ　カサアル。（あしこにはお金がうんとある。）カサ　メダツ　ヤッチャ。（たいへん目立つ奴だ。）

かさわな（形動）　目障りな。不快な。アイツワ　カサワナ　ヤッチャ。（あいつは目障りな奴だ。中男→同）

かったし（副）　次々に。順番にみな。かたっぱしから。スキナ　モンオ　カッタシ　カウンジャ。（好きなものを次々に買うんだ。中男→同）

かなきぎ（名）　川魚の名。ギギ。

がね（名）　蟹（かに）。「がんち」とも。

かもたか（句）　「構うものか」と仲間同士、禁じられていることを強行しようというときのことば。カモタカヤレヤレ。（構うものか。やれやれ。小男→同）

かんしょやみ（名）　潔癖症。神経質な人。

がんたろ（名）　大形のみみず。

かんまん（句）　差し支えない。許容する。お気遣いなく…。「かまん」とも。

きさがす（動五）　室内などを片付けず、とり散らかしている。

きむら（名）　猿。サル「去る」の語を忌んでの言い換え。

きしんどい（形）　じれったい。作業が細かすぎて嫌になる。

きめつける（動下一）　叱りつける。

ぎゃるー（名）　おたまじゃくし。

きらず（名）　豆腐のおから。

きわるい（形）　不快だ。気分を害する。

ぐちな（名）　蛇。

くないさん（名）　のんきに徒食している人を揶揄（やゆ）していう。

けちりん（副）　もう少しで。ごく僅か。ケチリンデ　バスニ　ノレタワ。（かつかつでバス乗れたわい。老男→中男）

けっこ（副）　可能の副詞。肯定、疑問に用い、打ち消しには用いない。ジーサン　ケッコ　ノボロカ。（爺さんあの山に登れるだろうか？中男→妻）

～けん（助）　原因の接続助詞。〈相生町では海部型の「さかい」「よって」や山分型の「きに」「けに」は用いず、「けん」を用いる。タカイモンジャケンノー。　キーツケテ　ツカエヨ。（高価なものだからね。気をつけて使えよ。老男→少男）

けんたい（形動・名）　公然と。当然のように。おおいばりで。イツノマニヤラ　ケンタイデ　ツカイヨルゾ。（他人の道具をいつの間にか当然のようにわがものがおで使ってるぜ。中男→同）

けんべき（名）　肩のこり。筋肉痛の部位としての肩。「けんびき」とも。

けんゆう（名）　子供の遊びで、地面に近くから遠くへ順に区画を描き、各自の石を起点から区画内に投げ入れ、順位を争うもの。

～こー（文末）　丹生谷の代表的疑問の文末詞。「こ」「こー」と長短ともに用いる。親しい人に対して用いる。コンドノ　リョコーニャー　オマイ　イクンコー。（今度の旅行にはお前行くのかい？老男→同）

ごーじばい（名）　川魚のヤマトバイのオス。繁殖期には体に虹のような婚姻色がつく。

こーとな（形動）　地味な。

こぎる（動五）　切り落とした木の枝などを運びやすい長さに切ること。

こじける（動下一）　かじかむ。手足が冷えて思うように動かぬ。

ごしゃめん（慣用文）　子供が店屋へ入るときの挨拶。昭和のはじめまで用いられた。

こっつり（副）　うまい具合に。細工物の出来具合などをいうのに用いる。コッツリ　イトルワ。（うまくできているよ。老男→同）

ごとんびき（名）　蛙（かえる）。

こなっしゃ（名）　遠隔の田圃（たんぼ）のそばに作る仮小屋。ちょっとした農具や肥料などを置く。

こぶち（名）　たわめた木で小鳥を弾く仕掛け。「こびち」「こぼち」とも。

こましごえ（名）　薦織り機の「こま」は直線的に手元の反対側に送る。そのように山越えで最短距離で結ばれた路。

ごりる（動上一）　懲りる。もう懲りごり。イッペン　イタケンドモー　ゴリタワ。（一度行ったが、ひどくてもうごめんだ。中男→同）

こんてつ（名）　根気づよい人。

さっきゃま（名）　杉などを切る仕事。またはその仕事に従事する人。

さで（名）　炭の原木などを切り出すうちに、もともとの低地がさらに深く掘れて木が転げて自然にたまるくぼみ。

さでる（動下一）　薪や材木を低い所へ落とす。〈「さで」の動詞形。〉

さどこい（形）　機を見るに敏なさま。人の機先を制する行動力。

さのぼり（名）　田植えが無事終わったことを祝っての小宴。「さなぼり」とも。

さぶろーごと（名）　ひきがえる。「ごとまつ」「ごとー」とも。

しいれ（名）　彼岸花。「ちゃんちゃんぼう」とも。

しぎょい（形）　頻繁だ。「しぎょい」とも。

しける（動下一）　①ひとみしりする。②干菓子などが湿る。

じじむ（動五）　にじむ。「じじゅむ」とも。

しばせせり（名）蜂の一種。ほそあしながバチ。

しゃえもん（名）　菜園で作る野菜。「しゃえん」とも。

しゃがー（名）　間違ったこと。事実に反すること。でたらめ。シャガー　ユーナ。（いい加減なことを言うな。中男→同）

しゃしゃっこ（名）　差し出口。

しゃんと（副）　①困ったことに、運悪く。シャント　ミツカッテシモタンヨー。（運悪く見つかってしまったのだ。中女→同）②ほんとうに、まったく。ネコワ　シャント　スカン。（猫はほんとに嫌いだわ。老女→中女）③「しゃんとする」で、何事にもくじけず、しっかりとした態度を取ること。ホレバーノ　コトデ　キーオト　サート　シャントセー。（それくらいのことで気を落とさないでしっかりせよ。中男→子）

～じぇー（文末）　断定の文末詞。「ぜ」とも。〈上がり調子にはねる〉ウチシランジェー。（わたしは知らないわよ）

じょーに（副）　たくさん。

しょうまえ（形動）　よく似ているさま。生き写しだ。

すいり（名）　潜水。「すいろ」とも。

すき（名）　子供を背負う帯。

すぼけ（名）　ふくらはぎ。

すっくら（副）　うまい具合に。じょうずに。「すっくり」とも。スックラ　デキトルワ。（うまく仕上がっているよ）

すら（名）　大量の材木を移動する時、摩擦を減じるため、90度の角度を持たして地面に丸太を敷き、その上を滑らせるしかけ。

ずんぎり（名）　すっぱり切った木の切り口。ズンギリ　ミタラ　ダレガ　ヒータカ　ワカルワ。（切り口を見たら誰が挽いたのか分かるよ。中男→同）

せわな（形動）　やっかいな。めんどうな。名詞に「な」を付けた造語が多い。

せんきる（動五）　自慢する。ジーサン

ヨー　センキンリョルワ。（爺さんいつも自慢しているよ。中男）

せんせこ（副）　こまごまとよく働くさま。

そーで（副）　間もなく。そのうち。ソーデ　ウチー　クルワ。（間もなくうちへ来るよ。中女→同）

そそはい（形）　あわてて軽率なさま。

～だ（文末）　文末、文中に頻出する阿波の特徴語。全県おなじ語感。〈やや卑〉シッパイモ　アッタワダ　ノー。（失敗もあったよね。中男→同）

たかで（副）　まるで。少しも。「かたで」とも。ホンナンデワ　タカデ　ハナシニ　ナランワヨ。（その程度の対策ではとてもお話にならないわよ。中女→子）

たけたけ（副）　端から端まで。ターノ　アゼー　タケタケ　ナワ　ヒーテノー。（田の畦を端から端までずっと縄を張ってね。中男→老男）

たたわしー（形）　あわてて落ち着かないさま。

たて（名）機会。コレオ　タテニ　ヤメンカノー。（これをしおにこんな習慣は止めようね。中男→同）

だぼそ（名）　風呂や桶の下部にある栓。

ちえる（動下一）　崩れる。落ちる。「ちぇーる」とも。

～ちゃ（助）　①「～とは」「～というものは」。ホレッチャ　ナンナ。（それって何だい？　中男→同）②「～にも～ない」ナンチャ　ナイ。（何もない。）〈いつ、どこ等の不定称に〉ドコッチャ　シヨレヘン。（どこもしていない。）

ちょーさい（名）　念仏の先導。先達。

つか（句）　下さい。「つかい」「つかはれ」とも。ホレ　ウチニ　ツカ。（それわたしに下さい。中女→親）

～つか（文末）　というか。ガッコイ　イカンツカ（学校へ行かないだって？中男→子）

つくまむ（動五）　しゃがむ。

つし（名）　屋根裏にしつらえた芋や穀物、家具などの置き場。屋根裏部屋。

つぼえる（動下一）　食べ物の嗜好が贅沢になる。口が奢る。万事贅沢の意にも。

つぶし（名）　ひざ小僧。

つぶろ（名）　まんじゅしゃげの球根。

つまえる（動下一）　しまう。大切にとっておく。

つりそ（名）　木を倒す時、全部は挽ききらず、少し残す、その残りの部分。

つろくする（動サ変）　調和する。釣り合う。コノショージワ　ヨー　ヘヤニ　ツロクシトル。（この障子はよく部屋に調和している。中女）

～で（文末）　ていねいな疑問。親や年上の隣人などに用いる。全県同じ語感。ホーデ（そうですか？中男→親）

てご（名）　手伝い人。介添えする人。

てどうから（句）　早くから。最初から。ホンナコトワ　テドーカラ　シトケヨ。（そんなことは早くからしておけよ。老男→中男）

てんご（名）　いらぬこと。冗談。「ほてんご」とも。

とえる（動下一）　叫ぶ。泣き叫ぶ。〈品位下〉

どがさやま（副）　副詞「かさ」の強調。

どくれる（動下一）　すねる。

とたん（副）　場面。場合。状況。イマラトタン　ワルイワ。（今はそれをするのにふさわしくないよ。中男→同）

とどしゅう（副）　朝早く。下ドシューカラ　オキテ　ドナイシヨン。（早くから起きてどうしているの？中女→中男）

どひょーしな（形動）　思い掛けぬ。残念な。不本意な。不自由な。〈品位下〉ドヒョーシナ　コッチャ　ノー。（困ったことになってしまったね。中男→同）

とべる（動下一）　ずり落ちる。〈品位下〉

とりやけ（名）　片付け。イエノ　トリヤケ　シヨッタンヨ。（家の片付けをしていたのよ。中女→同）

とろい（形）　①動力などが微弱であるさま。コノ　ウゴキワ　チョット　下ロインチヤウ　デ。（この動きは少し弱いのではありませんか？）②無気力だ。弱腰だ。ヨー　サカラワン　ノワ　下ロインジョー。（反論もできないというのは、弱腰なんだよ。中男→同）

とろこい（形）　馬鹿だ。不注意だ。下手だ。まずい。トロコイコト　スナ。（馬鹿なことをするな。）

なぐれる（動下一）　実入りにならぬことに時間、労力を費やす。無駄になる。ハヤ　ゴゼンチュー　ナグレテシモタ。（はや午前中空費してしまった。中男→同）

なる（名）　松や杉の細い丸太。

なるい（形）　傾斜がゆるやかだ。川の流れが緩い。

にちょうな（形動）　不器用な。ニチョーナ　ヤッチャノー。モットラシイシゴトセー。（不器用な奴だな。もっとらしい仕事をしろ。老男→中男）

にゃくい（形）　実力がない。役に立たぬ。

ねき（名）　そば。傍ら。

ねきもん（名）　置き古した商品。

ねそ（名）　作物や草などを束ねる藁（わら）。

ねんご（名）　いらぬ講釈。口説。

のー（名）　機械・器具やからだの調子。ノーワルイ　トケイヤ　モツナヨ。（故障した時計など持つなよ。小男→同）

～のー（文末）　念を押し、軽い感動を表す。男子の親密な間柄の普通の表現。キョーラ　カクベツ　アツイノー。（今日は格別暑いねえ。中男→同）上がり調子に言うと敬意や親愛の気持ち。女性が多く用いる。コノヘンデ　ヨー　ミル　クサジャノッ。（このあたりでよく見る草だわね。老女→中男）

のた（名）　泥沼。炭焼き作業のために近くに穴を掘り、ためてある水。

のへとー（名）　横着な。だらしない。ふまじめな。

ほざ（名）　普段。日常。ハザニワ　コレツカイヨンジャ。（普段はこの道具を使っているんだ）

はだいた（名）　板の間。

はたと（名）　いなご。「はたた」「はたはた」とも。

はっしゃぐ（動五）　①桶などのタガが乾燥のためゆるむ。②うかれる。陽気になって騒ぐ。

はどい（形）　好意的でなく、非協力的な態度。「はどい」とも。

ばばいー（形）　まぶしい。

ばらいも（名）　里芋。「ばらいも」とも。

はる（動五）　田畑を耕す。アサカラ　ハンリョルケンド　マダ　ハブンモイトラン。（朝から耕しているんだが、まだ半分もできていない。中女→同）

はんこ（名）　冬季、着衣の上に羽織るもの。

はんぼー（名）　五目寿司などを作り、入れる器。

ひく（動五）　草などを抜く。

ひっさがす（動五）　室内などを乱雑に取り散らす。「ひこずる」「きさがす」とも。

びっしり（副）　隙間のないさま。

ひなおる（句）　天気が持ち直す。

ひょーそくれる（動下一）　作物の生育が阻まれる。話し合いがこじれる。

びらくる（動五）　ぶら下げる。

ひんける（動下一）　干からびる。乾燥して縮む。

ふかんな（形動）　不器用な。

ふずくる（動五）　薦める。仕向ける。役割などを押し付ける。

ふむ（動五）　米麦を精白する。

ふるせ（名）　芋などの掘り上げてから日がたったもの。

へか（名）　よそ。的外れ。

べかこ（名）　あかんべ。「べっかんこ」とも。

へける（動五）　見せびらかす。ひけらかす。

へとろいき（形動・副）　むやみに。やたらに。

へらこい（形）　ずるい。こざかしい。巧妙だ。

へんしも（副）　一刻も早く。へンシモイカナ　マニアワン。（一刻も早くいかぬと間にあわぬ）

ほうばい（名）　仲間。友達。〈古風〉「ほうばい」とも。

ほたえる（動下一）　子供が室内などでふざけて暴れる。

ぼち（名）　謝礼。祝儀。こころづけ。「ぼちー」とも。

ほて（名）　蚊遣（かや）りのためボロ切れなどをふすべる仕掛け。

ほぼけ（名）　兆し。傾向。マエカラ　ホンナ　ホボケガ　アッタワノー。（以前からそんな傾向があった世ねえ。老男→中男）

まーまー（名）　幼児語「さようなら」。

まいこむ（動五）　枯れる。ヒデリデ　マイコンデシモタ。（ひでりで作物が枯れてしまった。老男→同）

まげる（動五）　邪魔になる。「まがる」「まぎる」とも。

まぜくる（動五）　撹乱（かくらん）する。

～まって（助）　～しながら。タベマッテモノ　ユーナ。（食べながらものを言うな。中男→子）

まどう（動五）　弁償する。

むこーばち（名）すずめ蜂。

むつごい（形）　あくどい。味が濃厚なさま。

めっぽ（名）　曲木で作った弁当箱。

めめる（動下一）　にらむ。「めめる」とも。

めんどらしい（形）　恥ずかしい。

もえる（動下一）　増加する。

やー（名）　くさび。

～やかい（助）　～など。～なんか。ウチノ　コーワ　ワルイコトヤカイ　セーヘンデヨ。（うちの子は悪いことなどしないですよ。中女→同）

やかな（形動）　しっかりしていない。ホンナ　ヤカナ　ダイニ　ノセレンダローー。（そんなちゃちな台には載せられないだろう？中女→夫）

やさね（名）　辺地。

やにこい（形）　しっかりしていない。人物、物性、天候などに用いる。「やねこい」「やでこい」とも。

やどいし（名）　へびの青大将。

ゆさくる（動五）　揺する。

よけ（副）　下に打ち消しがくると「あまり～でない」意。サケモ　ヨケ　ノマン。（酒もあまり飲まない。中男→同）

よもり（名）　いもり。

～ら（助）　「は」。コトシラ　アツイノー。（今年は暑いね。中男→同）

りん（名）　重いものを動かす時、テコの支点として下に敷きこむ枕木。

れんぎ（名）　すりこ木。「れんぎ」とも。

わやくる（動五）　台なしにする。秩序・形態などを無茶苦茶にする。

付　記

相生町の調査では、次の方々（敬称略）のご協力をいただいた。記して感謝する。

延野：香川清、西原貞子、大西クニ子、中村竹雄、

朴野：西田武生、岩沙孝男　　請ノ谷：湯浅裕、

谷内：能登一敏　　吉野：西田實、　　朝生：中野實

牛和：宮口一男　　鎌瀬：前川ミカエ、前川イチエ

なお、この稿の分担を明らかにしておく。音声面の調査と整理は石田祐子が、疑問終助詞の調査と分析は岩佐美紀が、方言語彙の選定と説明記述は金沢浩生が担当し、最終的な調整と修正を仙波が行った。また、調査には、他に藤本亜矢子が参加した。

（文責　仙波光明）

参考文献

相生町誌編纂委員会編（1973）『相生町誌』相生町

石田祐子・岸江信介（2001）「徳島県諸方言アクセントについて」『言語文化研究　徳島大学総合科学部』第 8 巻

小野米一編（1997）鳴門教育大学国語学（現代語研究）報告 3 『徳島県相生町雄地区の生活語』鳴門教育大学国語学研究室

金沢　治（1961）『阿波言葉の語法』徳島市中央公民館付属図書館

――――（1976）『阿波言葉の辞典』小山助学館

上那賀町誌編纂委員会編（1982）『上那賀町誌』上那賀町

木頭村編（1961）『木頭村誌』木頭村

徳島県那賀郡鷲敷町史編纂委員会編（1981）『鷲敷町史』鷲敷町

平山輝男・上野和明（1997）『徳島県のことば』明治書院

宮城文雄（1956）「徳島方言概観」『徳島大学学芸紀要』5（人文科学）

森　重幸（1962）「分布図からみた徳島県の方言」阿波学会報告会資料

――――（1982）「徳島県の方言」『講座方言学11　中国四国地方の方言』国書刊行会